2024年度　入学試験問題

国　語

（第3回・グローバル入試共通）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちはみんな「誰かに認められたい」と思っていますが、このことに異存のある人は、ほとんどいないでしょう。「自分は認められなくても平気だ」と思う人もいるかもしれませんが、そのような人であっても、子どもの頃は「親に認められたい」と感じていたはずです。つまり、ある条件があれば平気になる場合もありますが、もともとは誰もが認められたいのです。

でも、①いったいなぜ人はそんなに「認められたい」のでしょうか？

認められた経験を振り返ってみると、さまざまなことが思い出されるはずです。たとえば、幼い頃、母親が自分の悲しみ、悔しさを受けとめてくれたとき。部活で活躍してほめられたり、称賛されたとき。友だちを助けて感謝されたときや、おもしろい話をして、みんなが笑ってくれたとき……。いろんなことが思い浮かぶと思いますが、よく考えてみると、同じ認められた体験でも大きく二つに分けられることがわかります。

たとえば、勉強の成績がよかったり、仕事で成果を上げて周囲の人々に称賛されると、自分の力が認められた、評価してもらえた、という喜びが湧き上がってきます。一方、人間関係で悩み、苦しかったとき、親友が自分の気持ちによりそい、なぐさめてくれたときも、自分のことをわかってもらえたように感じ、嬉しくなるでしょう。この二つはどちらも認められた喜びですが、どこか承認の質がちがいますね。なにがちがうのでしょうか？

勉強やスポーツ、仕事の成績などで認めてくれる人たちは、その成績には価値がある、と思っています。だから成績がよいと称賛するわけです。困っている人を助けたり、みんなのために頑張った場合にも、感謝されて、その功績が称えられると思いますが、この場合も、そのような行為に価値がある、とみんなが思っているから、高く評価されるのです。

こうした行為を認める人たちは、みんなその行為に価値がある、と信じています。勉強ができることは偉いと思っているし、仕事ができるのは立派だと思っている。誰かを助けたり、みんなの役に立つことをした人に対しては、価値あることをしたなあ、と称賛し、尊敬の念さえわいてくるかもしれません。それもこれも、こうした行為の価値を認めているからなのです。

このように、ある行為の価値が評価されるような承認は、行為が承認の対象となっているので、とりあえず「行為の承認」と呼んでおくことにします。

［　　］、誰かになぐさめてもらった経験は、自分が相手に受け入れられていると感じるので、やはり「認められた」感じがするものです。これは行為の価値が評価されているわけではありません。同じように、誰かと話があい、共感してもらった場合でも、やはり自分が認めてもらえたような気がして嬉しくなります。特に行為で評価されなくても、趣味や考え方が近かったり、気

が合うだけでも、相手の承認を感じることはできるのです。

そこには飾らない素の自分、「ありのままの自分」でいられる気楽さ、安心感があります。無理をしなくてもよい、相手に合わせなくてもよい、そういう自由の感覚があるのです。それは「行為の承認」とはちがって、特に価値のある行為は必要ないし、自分という存在そのものが受け入れられたように感じるため、「存在の承認」と呼ぶことができるでしょう。

このように、私たちが「認められたい」欲望を満たす場合、認められるのが自分の行為なのか、それとも自分の存在なのかによって、二つに分けることができます。それが②「行為の承認」と「存在の承認」なのです。

（中略）

承認の経験は「何が承認されたのか」によって、「存在の承認」と「行為の承認」に分けられると述べました。一方、「誰に承認されたのか」という観点からすれば、家族や親友、学校や職場の仲間、世間一般の人など、さまざまな対象が思い浮かびます。しかも、それぞれ承認の質も異なるように思えるのです。

そこで、親密で信頼できる人に認められる場合を「親和的承認」、自分が所属する集団の人に認められる場合を「集団的承認」、見知らぬ一般の人々から認められる場合を「一般的承認」と呼び、区別しておくことにしましょう。

▼ 家族や親友、恋人といった人々は、そこに愛と信頼があるかぎり、「ありのままの自分」を受け入れてくれる存在です。特に優れた行為をしなくても、ただ存在するだけで喜んでくれるので、それは無条件の承認でもあります。失敗しても共感し、なぐさめてくれる。それが愛情に満ちた承認、すなわち「親和的承認」なのです。

広い意味で「存在の承認」について考えると、見知らぬ人に対しても、彼の権利、生き方、価値観の自由を認めるような、人権の承認を含んでいることがわかります。自分のことを生まれや見た目、生活、貧富、能力、信仰、障害、国籍などで差別せず、その存在をありのままに受け入れてくれる人がいれば、それは基本的な「存在の承認」が与えられたことになるからです。

これに対して親和的承認は、相手の気持ちを受け入れ、共感を示すことで「存在の承認」を感じさせます。親和的承認は共感的な承認であり、愛情に基づいているため、それは愛に支えられた「存在の承認」なのです。

一方、学校のクラスや部活の仲間、職場の同僚、趣味のサークル、宗教団体など、自分が所属する集団の人々は、自分がその集団における役割をこなし、貢献するなど、その集団の価値観にそった行動をしているかぎりは評価し、認めてくれるでしょう。これが「集団的承認」です。

集団的承認は、その集団にとって価値のある行為が承認の条件ですから、基本的には「行為の承認」です。たとえば学校の吹奏楽部でよい演奏をしたり、仲間のために練習の準備をしていれば、仲間から評価され、承認されるにちがいありません。職場で同僚に協力したり、仕事でよい成果を上げた場合にも同じことが言えます。これは集団の中での行為の価値が評価されているの

です。

集団に貢献しなくても、集団の価値観に合致しているだけで認められる場合もあります。趣味の共通する集団では、その趣味に関する知識や技能が優れていれば、それだけで称賛され、認められるでしょう。これは行為への評価というより、能力への評価と言ったほうが適切なようにも思えますが、能力は価値ある行為を生みますし、その能力が努力という行為によって培われたものならば、やはり「行為の承認」と言ってよいかもしれません。

このように、親和的承認の内実は「存在の承認」であり、集団的承認の内実は「行為の承認」ですが、親密な関係にある人が成績をほめてくれた場合は「行為の承認」であり、所属集団の仲間が失敗を慰めてくれた場合、それは「存在の承認」を与えていることになりますから、この点ははっきり区別できない面もあるのです。

私たちの日常で承認を与えてくれるのは、たいていの場合、家族や友人、学校の仲間や職場の同僚なのですが、これらはお互いに補い合う関係にあります。

たとえば、職場や学校で失敗したり、よい成績、パフォーマンスができず、集団的承認が獲得できなくとも、愛する家族や親友、恋人がなぐさめ、そばにいて話を聞いてくれさえすれば、親和的承認を得ることはできるでしょう。逆に、親の期待や要求の水準が高すぎて、「ありのままの自分」を受け入れてくれない場合でも、必死で勉強するなど、がんばって努力すれば、親にもなんとか認められるし、周囲の人々からも称賛を得ることができます。

親和的承認は集団的承認の失敗や不足をおぎない、「行為の承認」は「存在の承認」の欠落した穴を埋めてくれます。③種類の異なる承認は、互いに補い合う相互補完的関係にあるのです。

（中略）

すでに述べたように、それぞれの承認は、お互いに補い合う関係にあります。親の親和的承認が得られなければ、がんばって「行為の承認」を得ようとしたり、自分の属する集団の役割をこなして、みんなに認められようとするでしょう。また、がんばっても認められない場合は、自己承認によって不安を緩和することも少なくありません。

ただ、こうした相互補完は承認の質が違うので、完全には補えない面もあります。集団的承認が得られても、親和的承認がなければ十分な満足は得られませんし、自己承認できても、やはり誰かに承認されたいものなのです。

心理学者のマズローは人間の欲求を五段階に分け、それぞれ優先順位があると言っています。生理的欲求や安全性の欲求が優先され、それが満たされると、愛と所属の欲求が生まれ、これも満たされると、承認への欲求、自己実現への欲求、と続くのです。つまり、愛が満たされなければ、承認への欲求は出てきませんし、承認への欲求が満たされなければ、自己実現への欲求は出てこない、ということになります。「愛の欲求は承認の欲求よりも強く、そして承認の欲求は、我々が自己実現の欲求と呼んでいる独自性欲求よりも強い」（『人間性の心理学』）のです。

④この理論は日常における私たちの感覚からみても、一定の説得力があると思います。私たちは

多くの人々の承認よりも、愛を優先することがあります。そう考えると、愛情を基盤とする親和的承認が、集団的承認より優先されるのは当然であり、どんなにがんばって周囲に認められても、愛情に基づく親和的承認がなければ寂しいものです。また、自己実現の欲求は、自分の力を発揮し、可能性を広げたい欲求ですが、これもやはり、誰かに承認される自分があってこそ、自信をもって行動できるし、そうした自分を自己承認できる場合が多いでしょう。

いずれにしても、人間にとって承認がきわめて重要であることに変わりありません。では、いったいなぜそれほどまでに認められたいのでしょうか？

これは承認されたときの感情について考えてみればわかります。誰かに認められたとき、私たちは安心感、よろこび、充実感を抱くでしょう。それは「自分には認められるだけの価値がある」というよろこび、安心感であり、充足感です。これこそ、私たちが「認められたい」理由なのです。

自分の存在価値のことを自己価値と呼ぶなら、まさに自己価値を確信したいからこそ、人は承認を求めているのです。

親和的承認への欲望は、あるがままの自分の存在そのものに価値があることを認めてほしいのであり、集団的承認への欲望では、自分の行為や能力による成果への評価をとおして、自分が役立つこと、価値のある存在であることを認めてほしいのです。自己承認も自分の価値を確信したい思いが根底にあります。

私たちは、自分に存在価値がなければ、生きている意味を感じられません。他者の承認をとおして、自分の価値を確信し、「生きる意味」を見出すこと、これこそが「認められたい」という人間的欲望の中心にあるものなのです。

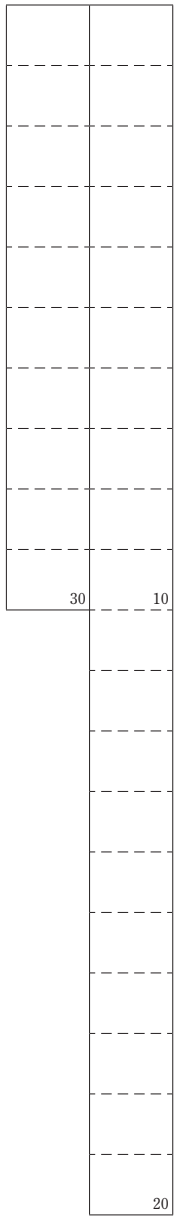
（山竹伸二『ひとはなぜ「認められたい」のか』より）

問1　次の段落はもともと文中にあったものです。どこに入れるのが最もふさわしいですか。あてはまる部分の直後の五字をぬき出しなさい。

これは相手の存在そのものを無条件に認めるため、「存在の承認」でもあります。

問2　――線①「いったいなぜ人はそんなに『認められたい』のでしょうか」とありますが、その理由を三十字以内で説明しなさい。

（下書きらん）



問3　――線②「『行為の承認』と『存在の承認』」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　価値あることを成し遂げたと認められるのが「行為の承認」で、何もしなくても自分を受け入れてもらえるのが「存在の承認」である。

2　結果に対してほめられるのが「行為の承認」で、目標を達成するためのより良い方法を一緒に考えてもらえるのが「存在の承認」である。

3　気の合う人たちの間で称賛されて尊敬されるのが「行為の承認」で、ありのままの自分を無条件で認めてもらえるのが「存在の承認」である。

4　日々の勉強や仕事を続けて立派だと思われるのが「行為の承認」で、気楽に称え合うことで互いに安心させてもらえるのが「存在の承認」である。

問4　空らん□にあてはまることばとして最もふさわしいものを、文中より漢字二字でぬき出しなさい。

問5　次の1～4は、本文を読んだ生徒たちの会話です。文中の▼から▲の内容をふまえた発言として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　生徒A　家族とか仲の良い人とか、特別親しい人は何もしなくても自分のことを認めてくれるよね。「存在の承認」をしてくれる人は、みんな「親和的」な人だと言えるね。

2　生徒B　「行為の承認」は、集団の中で価値のある成果を残すことが条件だったはず。いくら集団の他の人に好かれていても、何もできないようじゃ認めてもらえないよ。

3　生徒C　確かに、価値のある行為をすれば信頼を得られるし、そうすれば「親和的」な人も増えるだろう。何にしても、承認の内容は誰に承認されるかで決まるみたいだ。

4　生徒D　でもさ、所属集団の人がちょっとした悩みを聞いてくれたりさ、誰が承認するかと何が承認されるかの関係は完全に固定されているわけではないんじゃないかな。

問6 ――線③「種類の異なる承認は、互いに補い合う相互補完的関係にあるのです」とありますが、その具体例として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 口べたなため職場では営業成績があがらず出世できないが、恋人は文句も言わず近くにいてくれる。

2 いつもは優しいお母さんだが、夏休みに寝てばかりいたら機嫌が悪くなり、勉強しろと怒られた。

3 テストで点数が取れない時でも、担任の先生は勉強をがんばったという事実をほめてくれる。

4 急な雨で遠足に行けなくなって悲しかったが、代わりに友達と映画を見られてうれしかった。

問7 ――線④「この理論」とありますが、これをふまえて筆者はどのようなことを考えていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 人権の承認を含む「存在の承認」を得ることで、生理的欲求や安全性の欲求が満たされて、自信を持った行動につながるのだということ。

2 「行為の承認」を得ることで「存在の承認」の不足をある程度補えるが、「存在の承認」が十分になければ結局むなしいものだということ。

3 愛と所属の欲求が生まれることは、親和的承認と集団的承認両方の重要性を裏付けてはいるが、親和的承認の方がより重要だということ。

4 自信をもって行動するには、自分で自分の存在や価値を認めてあげることが最も重要であるため、「存在の承認」を得ることが必要だということ。

問8 この文章の内容を説明したものとしてふさわしいものには○、ふさわしくないものには×でそれぞれ答えなさい。

1 子どもの頃は誰もが認められたいと思っているが、大人になるにつれてその感情は薄くなっていく。

2 周りの人にどれだけ認めてもらっても、自分で自分を認められない限り本当に承認を得たことにはならない。

3 具体的な成果をあげなくても能力があれば認められるのは、能力と行為に結びつきがあるからである。

4 人間は「生きる意味」を見出すため、「行為の承認」よりも「存在の承認」を優先して求めるものである。

2　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先週の火曜日のことだ。

9月の三連休に中学の同窓会があって、私は久しぶりに塗ったネイルをオフするのを忘れて出勤してしまった。短大卒業後、幼稚園教諭の仕事に就いて一年半になる。ちょっと気がゆるんでいたのかもしれない。

一応、ネイル禁止という規則はない。でもそれはなんとなく暗黙のルールになっていて、ネイルはおろか化粧もしてこない先生もいる。

ネイルの色はピンクだった。そんなに派手な色ではない。爪は短く切りそろえてあるし、ストーンやラメもつけていないから、はがれて食事に入ったり園児をひっかいたりすることもない。安全だ。今日だけ、ごまかして過ごそう。先生や園児の視界に手がなるべく入らないよう心がけながら、私は午前中を乗り切った。

お弁当の時間だった。私が牛乳の入ったコップを配っているとき、萌香ちゃんが「わあ」と声をあげた。

「えな先生、おててキレイ」

はっと手をひっこめようとしたがそうもいかない。配らなければならない牛乳のコップがまだトレイに載っていた。他の先生に聞こえていないのを確認すると私は、「ありがとう」と小さく言って笑いかけ、急いでコップをテーブルに置いた。

萌香ちゃんの隣に座っていた、きのこ頭の拓海くんが得意気に言う。

「僕のおかあさんもやってるよ。爪にお絵かきしてくれるお店があるんでしょ」

それを受けて、向かいにいた瑠々ちゃんも食いつくように身を乗り出し、私の指に見入った。瑠々ちゃんのきつく結んだおさげの先が牛乳に入りそうになって、私はコップをよけた。

「えな先生もお店でやってもらったの？」

瑠々ちゃんは私の指をつかむ。こうなるともう逃げられなかった。

「ううん、お店じゃなくておうちで、自分でやったよ」

「自分でできるの？」

「できるよ、簡単だよ」

私はコップを配り終え、ひきつった笑顔だけ残して退散した。

帰り際、萌香ちゃんがおずおずとやってきて、ささやくように言った。

「えな先生、また明日もおてて見せてね」

はにかみながら私を見上げる萌香ちゃんの手を見て、私は「あっ」と声をあげそうになった。すんでのところで、それをこらえる。

「……うん、明日ね」

①翌日も、その次の日も、私はネイルをつけたまま出勤した。

「事務室に来て」

閉園のあと、片づけをしていたら泰子先生が私の耳元でぼそりと言った。金曜日の夕方のことだ。同僚数人から心配と好奇の混ざった視線で見送られつつ、私は泰子先生の後についていった。

泰子先生は勤続15年のベテランで、「化粧をしない先生」だ。眉毛さえ描かない。顔立ちは整っているから、メイクしたらけっこう美人なのにと思う。だけど彼女にしてみれば大きなお世話だろう。いつも高圧的で、私は最初からなんとなく彼女に好かれていないだろうなと感じていた。事務室でふたりになり、ドアを閉めると泰子先生は言った。

「あなたねぇ、手、見せてごらんなさいよ」

②前置きもなく、第一声、それだった。言われるまま右手を差し出すと、泰子先生は乱暴に私の指をつかんだ。

「何考えてるの、ネイルなんかして！」

そう言い放つと、今度は汚いものを捨てるように私の手をはらう。

「添島瑠々ちゃんのお母さんから苦情がきてるのよ。あなたのせいで、瑠々ちゃんが爪にマジックを塗って困るって。あなた、子どもたちに、お店に行かなくても自分で簡単にできるって言ったらしいわね。どうしてそんなイけしかけるようなことするの」

そういえばさっき、瑠々ちゃんのお母さんとすれ違った。私が挨拶したら、ふいっと顔をそむけられたっけ。彼女がよく着ているボーダーシャツの後ろ姿を私は思い出す。

「けしかけたわけじゃ……」

「言い訳しないで。他のお母さんたちだって気づいてるわよ。あなただけじゃなくて園全体の印象が悪くなるのよ？」

私は奥歯をかみしめた。そんなふうに頭ごなしで私が悪いと断定されたら何も言えない。黙っていると、泰子先生は勝手に話を進めていく。

「仕事が終わったら彼氏とデートとかでオシャレしたいんだろうけど、仕事は仕事、プライベートはプライベートできっちり分けないとだめよ」

違う。ぜんぜん違う、違います。否定しようとして、やめた。泰子先生は常に自分が正解なんだろう。話しても無駄な気がした。私だって、自分なりに一生懸命仕事に取り組んでいる。でも、私がどうしてネイルを取らなかったか、その「理由」をどう説明すればいいのかわからなかったし、私にはそれが正解なのかも自信がなかった。

「とにかく、ネイルは取りなさい」

「……わかりました」

やっとのことでそれだけ言い、③私はぎゅうっと拳を握った。ピンクの爪を隠すみたいに。

（中略）

萌香ちゃんが退園すると園長から聞かされたのは、10月も半ばに差しかかったころだ。お父さんの急な転勤で、来週には引っ越しするという。

「えな先生」

お迎えのとき、萌香ちゃんのお母さんから呼び止められた。普段口数が少なくて控えめな彼女から、声をかけられたのは初めてだった。

「萌香がお世話になりました」

「……萌香ちゃん、お引っ越ししちゃうんですね」

「ええ」

ほんの少し間があって、何か言わなくてはと思ったところでお母さんが口を開いた。

「えな先生。萌香ね、爪噛みが治ったんですよ」

お母さんが静かな笑みをたたえて言う。

「あの子、前は指の爪ぜんぶ噛んでしまって、ひどいときは血が出るくらいで……。悩みました。育児書を読むと、やめなさいと叱ってはいけないとか、愛情不足が原因だとかって書いてあるし。こんなに大事に想ってるつもりなのにどうしてって、まるで自分が責められているようにも思いました」

「……」

「一カ月ぐらい前、えな先生の爪はきれいなピンクなんだよって、うれしそうに話してました。萌香もあんなきれいな手になりたいって。だから爪はもう噛まないって、自分から。ギザギザで伸びる間もなかった爪が、今ではちゃんと揃ってます」

萌香ちゃんのお母さんは声を震わせる。私も胸がいっぱいになって、涙がこぼれそうだった。ああ、よかった。私の願いは通じていた。私が※マコちゃんに憧れたように、萌香ちゃんが私のピンクのネイルを素敵だと感じてくれたなら、爪噛みしなくなるかもしれないと思ったのだ。

「ありがとうございます」

深々とお辞儀をするお母さんに、私は④しどろもどろになって言った。

「でも、私、すぐにネイル取っちゃったから、萌香ちゃんガッカリしたんじゃないかと思います」

お母さんは身体を起こす。

「いいえ。萌香がきれいだと言ってたのは、ネイルを取ったあとの爪のことです」

「え？」

「泰子先生から、聞いてません？」

聞いていない、何も。泰子先生の名前が出てくること自体、予想外だった。

「最初はネイルをかわいいと思ったみたいで、それがきっかけだったのはたしかです。でも、えな先生がネイルを取ったあと、泰子先生がみんなに言ったんですって。えな先生の手は、働き者の手だよねって。たくさん笑って、たくさん食べて、なんでも楽しくがんばっていると、えな先生みたいにきれいな爪になるよ。大人になってから、爪に色を塗ってオシャレしたいなと思ったとき、

元気な爪だったら素敵だよって」

……泰子先生が、そんなこと？

びっくりして、何も言えなかった。萌香ちゃんのお母さんは、自分の手をじっと見る。

「爪って健康のバロメーターですもんね。私、しばらく自分の爪なんか見てなかった。夫は仕事が忙しくてほとんど家にいなくて、ひとりで育児を背負ってる気がして……キリキリしてたなあって気づきました。転勤先では、もっと家族一緒にいられると思うんです。私も萌香ときれいなピンクの爪になれるように、元気で、笑顔でいたいと思います」

お母さんが笑ったときの目元は、萌香ちゃんとよく似ている。

おかあさーん、と萌香ちゃんの明るい声がして、こちらに向かって走ってくるのが見えた。

「さびしいわねぇ、お別れなんて」

振り返るといつのまにか泰子先生がいて、私は「ひっ！」と飛び上がった。道端で突然ヘビに出くわしたみたいな私に、泰子先生が眉をひそめる。

「そんなに驚かなくても。挨拶しようと思ってさっきからそばにいたけど、出て行ける雰囲気じゃなかったから」

泰子先生は、⑤なんだかきまり悪そうにそっぽを向き、門に向かって歩き出した萌香ちゃん親子に目をやった。

私は「あの……」と切り出したが、かぶせるように泰子先生は言う。

「べつに、あなたのことかばったわけじゃないから。まあ、でも……」

泰子先生はやっと、私の顔を見た。

「がんばってるっていうのは、本当でしょ」

泰子先生がいつになく穏やかな口調で言うので、私は面食らってしまった。もしかしたら、私のことを意外とわかってくれているのかもしれない。そう思ったら、なんだかジンときた。そんな私をちらりと見ると、泰子先生は強い口調で言った。

「だいたいねぇ、ちゃんと説明してくれれば私だって頭ごなしに注意したりしなかったのよ。ふてくされた顔で黙ってないで、ちゃんと話してくれたらよかったのに」

いつものようにきつく言われているのに、威圧的には感じなかった。泰子先生自身じゃなくて、私の受け止め方が変わったからだと気づく。

「どう説明すればいいのか、よくわからなかったんです。瑠々ちゃんのお母さんが怒るのも無理ないって思うし」

私が答えると、泰子先生はふと真剣な表情を浮かべた。

「わからなくても、話してほしい。私も経験があるの。あなたぐらいのころ、色付きのリップクリームを塗っててね。口紅ってほどじゃなかったんだけど、子どもを抱っこした拍子に、シャツについてしまって。男の子だったの。その子のお母さんからいかがわしいって非難されたわ」

「そんな……」
「ううん、私が悪い。だからなるべく体に色をつけないようにしてきたの。一方で、ちょっとはお化粧するのが大人の身だしなみだって言うお母さんもいる。いろんな考え方があるからね。あなたのネイルにしたって、萌香ちゃんの爪噛み治しにひと役買ったのは間違いないと思う。でも、必ずしもいい方向に行くとは限らないし、すべての保護者さんが受け入れてくれるかはわからない。かんじんの子どもたちにとって何がいいかは、私たちがそのつど肌で感じるしかないのよ」
私はうなずいた。不思議なくらい心が落ち着いていた。
ひとつひとつがライブなんだ。試行錯誤で、体当たりで、合っているかどうかわからない正解を探し続ける。毎日毎日、音を立てるように大きくなっていく子どもたち。ひとりひとりと向き合いながら、きっと私も、伸びていく。
「難しいですね。すごく大変だけど……でも、やりがいってこういうことを言うんだなって、わかった気がします」
私が言うと、泰子先生は「あら、生意気」とちょっとおどけた。
「私、ずっとえな先生のこと気になっちゃって、つい厳しすぎること言ってたかもしれないわ。あなた、私の若いころに似てるのよね」
「え」
反射的に体がのけぞる。
「なに嫌がってるのよ！」
「嫌がってませんよ！」
私たちは笑い合った。そんなことは初めてだったけど、ほんとうは私も、もうずいぶん前から泰子先生とこんなふうに話したかったような気がする。
ああ、見つけた、と私は思った。
今は仕事を辞めない。しばらく、ここでがんばる。だって、こんなにうれしいもの。萌香ちゃんがきれいな手になりたいと思ってくれたことも、萌香ちゃんのお母さんがあんなに安らいだ顔で笑ったことも、そして、泰子先生を近くに感じられることも。
私のやりたいことは、まだこの幼稚園にたくさんある。それが私の、ここにいる「理由」だ。
（青山美智子「のびゆくわれら」より）

※　マコちゃん……「私」の従姉。「私」にとって憧れの存在。

問1　〰〰線ア「おずおずと」、イ「けしかける」のここでの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア「おずおずと」

1　おもねる様子で　　2　緊張した様子で

3　悲しげな様子で　　4　ためらう様子で

イ「けしかける」

1　機嫌をとっておだてる　　2　そそのかしてやらせる

3　きびしくしてせめたてる　　4　うまくだましてしむける

問2　この文章の最初の場面での「私」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　爪の色を落とすのを忘れて出勤してしまいやましく思ったが、爪に色がついているだけなので仕事に支障はないと考え、なるべく気づかれないように今日一日を乗り切ってしまえば良いと考えている。

2　出勤する前に爪の色を落とすことをうっかり忘れてしまった自分に憤りを感じたが、園児を直接傷つけたりするものではないので、安全面に配慮さえすればこのまま乗り切れると考えている。

3　気のゆるみからうっかり爪の色を落とすことを忘れてしまったことに焦りを感じていたが、保育をするにあたって園児に影響はなさそうだと開き直り、注意されるまでは落とさずにいようと考えている。

4　久しぶりにおしゃれをしたことにうかれた気持ちのまま爪の色を落とさずに出勤してしまい後悔していたが、色が食事についたりしなければ衛生的にも影響はないのでこのままでも良いと考えている。

問3　――線①「翌日も、その次の日も、私はネイルをつけたまま出勤した」とありますが、私がネイルをとらないまま出勤していたのはなぜですか。その理由にあたる部分を解答らんの「～から。」につながるように文中から四十七字でぬき出し、はじめと終わりの三字で答えなさい。

問4　――線②「前置きもなく、第一声、それだった」とありますが、泰子先生が前置きもなく話を始めたのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　「私」がネイルをしていると耳にし、園児への影響を考えずに軽はずみな行動をとっていることに憤る気持ちと、立場上すぐにでも注意をしないといけないという責任感から気持ちがはやっていたから。

2　「私」がネイルをしていると知り、幼稚園のルールを守っていないことに怒りの気持ちがわいているのと同時に、先輩教諭として早く注意しなければいけないという責任感で気持ちがたかぶっていたから。

3　「私」のネイルが原因で保護者から苦情がきたので、その原因を作ったことに対してすぐにでも文句を言いたいと興奮しているのに加え、早く保護者対応をしなければという使命感にもかられているから。

4　「私」が自分に相談もせずに爪に色をつけてきていることに対して怒りを感じているうえに、幼稚園のためには自分がすぐにでも注意をしてネイルを落とさせなければという使命感にかられているから。

問5　――線③「私はぎゅうっと拳を握った。ピンクの爪を隠すみたいに」とありますが、この時の「私」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　自分が考えた良いアイディアを説明しようとは思ったが、泰子先生は自分が一番正しいというタイプの人なので理解してくれるはずもないし、説明しても意味がないと自分を押し殺すしかなくなっている。

2　泰子先生に言い返したい気持ちはあるが、こちらの言うことなんて聞いてくれるはずもないし、もともと苦手な泰子先生を前にすると言葉もつまってしまうので自分を押し殺すしかなくなっている。

3　自分の考えに自信はないので、まずは泰子先生に伝えてみなければ始まらないと思っているが、こちらの言うことなんか聞く気もないという相手の態度を見て自分を押し殺すしかなくなっている。

4　泰子先生に反論したい気持ちはあるが、相手は自分の意見を一方的に押しつけてくるような人だし、自分の行いが正しいかどうかもわからないので自分を押し殺すしかなくなっている。

問6　――線④「しどろもどろになって言った」とありますが、「私」がこのような態度になったのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　自分は萌香ちゃんに対して何一つしてあげられなかったと悔やんでいたところにお礼を言われてびっくりしたから。

2　自分は最後まで萌香ちゃんに寄り添い続けることができなかったと思っていたところに深くお礼を言われて困惑したから。

3　自分のしてきたことを最後まで信じられなかったという引け目を感じていたところに深くお礼を言われて意外に感じたから。

4　自分のやったことは正しかったと感極まって興奮しているところにお礼を言われて何を言われているのかすぐ理解できなかったから。

問7　――線⑤「なんだかきまり悪そうにそっぽを向き」とありますが、泰子先生がこのような態度をとっているのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　厳しくだめだと批判していたネイルのことを園児の前では素敵だとほめていたことが「私」に知られてしまい、本人の前に出ていくことに気まずさを感じているから。

2　いつもはあえて厳しい態度をとって隙をみせないようにしていたのに、実は後輩思いな一面ももっていたことが知られてしまい、「私」の前に出るのが照れ臭いと感じているから。

3　「私」の前では厳しい態度をとっていたが、陰ではその努力を認めてほめていたことが知られてしまい、本人の前に出ていくことに気恥ずかしさを感じているから。

4　爪の色からヒントを得て自分の言ったことが園児の成長につながったということを「私」に知られてしまい、本人の前でどんな顔をすればいいかわからなかったから。

問8　この文章全体における「私」の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　自分が園児を思って行動していてもそれが理解されないこともあり幼稚園教諭を続けることの意義を見出せなくなっていたが、ある保護者との会話がきっかけになり一つの正解を探すのではなく目の前の子どもたちと一緒に成長していけばいいという考え方ができるようになった。

2　自分が園児のことを考えて行動していることを周りにうまく伝えることができずに職場で孤独を感じていたが、ある保護者との会話がきっかけになり、見えないところで大勢の仲間に助けられていることを実感してこの幼稚園で自分を成長させていこうと感じるようになった。

3　自分が園児のためにした行動をベテランの先生に否定され、幼稚園教諭を続けていくことに自信を失っていたが、ある保護者との会話がきっかけになり相手に理解してもらうのではなく自分が人に合わせるのが優秀な先生としての第一歩なのだと気づきより努力をしていこうと強くちかった。

4　自分がしていることは園児のためになっていると自信を持って行動しても周りにはそのことが理解されずに仕事に対する意欲を失いかけていたが、ある保護者との会話がきっかけになり多くの保護者が自分を応援してくれていたことに気づきこのまま自分らしさを貫こうと決めた。

問9　次の1～8はこの文章を読んだ生徒たちの会話です。本文の内容をふまえた発言として**ふさわしくないもの**を**二つ**選び、それぞれ番号で答えなさい。

1　生徒A　まだ若い幼稚園の先生が成長のきっかけをつかむ姿が見られる物語だったね。

2　生徒B　そうだね。そのきっかけにはベテランの泰子先生の存在も大きかったように感じたよ。

3　生徒C　本人を直接ほめはしないけど、陰でしっかり見てくれている泰子先生みたいな先輩がいたら心強いよね。最初に登場した場面と最後の場面とでは泰子先生への印象が大きく変わったよ。

4　生徒D　うん。泰子先生が「私」を思ってとった厳しい態度が「私」に先生としてのやる気を起こさせ、前に進ませているよね。

5　生徒A　それにしても幼稚園の現場で働く先生って大変そうだよね。園児の爪噛みみたいなくせにも気を配るなんて。

6　生徒B　園児のくせを治すために暗黙のルールをやぶってでも行動した「私」は勇気があるね。

7　生徒C　萌香ちゃんがきれいに色をつけた爪をまねて爪噛みをやめたんだよね。「私」の作戦は見事に的中したと言えるよね。

8　生徒D　「ライブ」って言葉も出てきたけど、子ども相手の仕事だから日々いろいろと考えて相手に合わせて行動したりしているんだね。自分たちもそうやって見てもらっていたかと思うとありがたいね。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

何処へ　　佐藤勝太

地下鉄の改札を出ようとする老婆が
ゲートに止められて戸惑っている
駅のコンコースの雑踏で
車椅子の青年が
①行き先を探してためらっている

人の流れの中ほどで
ハイヒールの片足が
投げ出され俯いている
人の脚はそれを跨いで
そそくさと急いで行く

②低い天井に ※どよもす音響は
迷路のような地下街を貫流して
絶えることはない
いつまでも
どこまでも
続く人の帯は切れない
人々を巻き込んで
どこへ行き着くのか
肩を触れ合い眥を上げて
声もなく行き交う孤独

地上は雨
新緑の街路樹の間に
満開の傘が揺れている
向こうの車道を
飛沫をあげて走る
車列もまた
エンジンを吹かして急ぐ

（『夕陽の光芒』より）

※　どよもす……鳴り響かせる

問1　この詩に使われている表現技法の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　第一連には直喩が用いられている。
2　第二連には対句が用いられている。
3　第三連には体言止めが用いられていない。
4　第四連には倒置法が用いられていない。

問2　――線①「行き先を探してためらっている」とありますが、この青年の様子を説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　自分も急いですすむべきかどうかためらっている。
2　どのように進めばよいかわからずためらっている。
3　今日行くべき目的地を選びきれずためらっている。
4　だれかに助けを求めてもよいかをためらっている。

問3　――線②「低い天井にどよもす音響」とありますが、どのような音だと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　ホームに入ってくる地下鉄のごう音や構内アナウンス。
2　地上に降り注ぐ雨の音や勢いよく走り去る車の走行音。
3　互いにぶつけ合う怒号や行き先を見失う人々のため息。
4　息苦しい空間での足早な人々の足音やさまざまな物音。

問4　この詩の表現上の特徴を説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　地下街にいる人々を「流れ」や「帯」などと表現することによって、そこに行き交う一人一人の存在感をうすめている。
2　地下の場面の社会的な弱者と地上の場面の生き生きとした街路樹を対比させることによって、社会がかかえる問題が描かれている。
3　擬人法などの表現技法を効果的に用いることによって、街そのものがまるで生き物のように感じられる工夫がされている。
4　ハイヒール、新緑の街路樹、満開の傘など色彩豊かな表現を多用することで、地下街を歩く様々な人々のゆれる心情を描いている。

問5　この詩から読み取れることとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　人にもまれて歩くうちに、自分がどこへ向かっているのかも忘れている人々への嘲(あざけ)り。

2　人々が群衆の中で周りへの関心を失い、もくもくとどこかへ向かっていることへの憂(うれ)い。

3　目的地へ急いでいるため、社会的弱者たちへ助けを出すこともできない人々の悔(くや)しさ。

4　雨を浴びている新緑が予感させる、どこへ行っても人がいる息苦しさからの解放。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

1 神社の正しいサンパイ方法を学ぶ。

2 新しい商品のセンデンをする。

3 読者の声を紙面にハンエイさせる。

4 彼の額には苦労のあとがキザまれている。

5 オン着せがましい態度をとる。

問2 昨年、プロ棋士の藤井聡太さんが、史上初の将棋タイトル八冠を達成したことが大きな話題となりました。今私たちが何気なく使っていることばの中には、将棋から生まれたものもあります。次の1～5の文の空らん□には、将棋を由来としたことばが入ります。（ ）の中の意味を参考にしてあてはまることばを解答らんの文字数にあうように漢字で書きなさい。

1 あの人は土地を相続して裕福になった□だ。
（急に金持ちになること。また、その人。）

2 リーグの優勝に□をかける。
（最終的な勝利を得るまであと一歩の段階。相手の死命を制するような決定的な手段。）

3 □な物言いで周囲に嫌われる。
（相手に対して高圧的な態度をとること。また、そのさま。）

4 このまま組織が分裂するのは□だ。
（そうなるのは避けられないこと。また、そのさま。）

5 試合の立ち上がりから□に回ってしまう。
（他に先を越されること。また、相手に先に攻められて受け身の立場になること。）